

住民参加運動としての共同作業所づくり
下意上達型福祉運動の課題

91年度日本地域福祉学会

発表者 上野市社会福祉協議会

平井俊圭

上野市に共同作業所をつくる経過

これまで社協運動を福祉課題の住民による共通認識と、課題解決のための運動と捉えて行なってきた。作業所づくりはその典型である。

昭和59年度～昭和62年度 在宅障害者宅訪問 7ケース（親の帰っている夜に）

認可入所施設の建設計画が遅々として進まない中、障害者の親はぜひ上野に共同作業所が必要だとの願いのあることが明らかになってきた。それは、訪問の中で、各種の福祉制度等に関する相談に応じることから始まった。当初一部の親は自分の死後を考え、入所施設を望んでいた。しかし、現実には不可能に近く、まず私達で可能なところから始め、障害のある人を地域から隔離するのではなく、地域の人に障害のある人についての理解と協力を求める意味からも、障害のある人があたりまえに暮らせる”まち”にするためにも共同作業所の必要性を訴えた。

具体化するきっかけは、ある家族が上野市へ転居して来て、福祉センターに相談に来たことから始まる。

昭和62年12月初旬 名張市にある身体障害者デイサービスセンター「ききょうの家」のサービスを身体障害と知的障害の重複障害のある子供が利用できるだろうと、名張市に隣接する上野市へ鳥羽市から転居して来たのである。わらにもすぎる思いで、上野市の福祉事務所に相談に行くが、名張市への措置は行っていないと断わられてしまう。あきらめかけて福祉センターへ。母親はこんなことなら名張市へ越すことまで考えていると言う。ちょうど作業所づくりを進めているところでもあり、作業所について説明。訪問中の何人かと共に話を進めることにする。

昭和63年1月初旬、偶然市内から滋賀県内の作業所に指導員として働きに出ているY氏と知り合う。先の母親にも紹介し、作業所づくりを共に始める。

今のまちは何かおかしい

障害のある子は上野市からバスに揺られておよそ2時間もかけて養護学校へ通う。学校についた頃にはくたくた。帰路も同じ。家に帰ると、もうすでに地域の友達はおろか地域社会からかけ離れてしまっている。地域の人にも障害のある人にどうかかわっていいのかわからなくなっている。

養護学校は卒業しても、運よく就職できる人はごくわずか。やむなく在宅で居たきりか、施設入所の2者選択。たとえ就職できても、職場の人間関係のトラブルで退職に追い込まれることもしばしば。このことによって本人の自信はもろくも崩れ去ってしまう。再び就職するためには、想像を絶する大変な努力を必要とすることから、ほとんど就職に結び付かない。何かおかしい。普通に働きたい。仲間をつくりたい。住み慣れたところで暮らしたい。当り前の願いだけど障害があるために実現されないというのは。

作業所を利用したいという人はだれでも受け入れよう。それがこれまでの施設と違う点。仲間のすべてが顔と名前を覚えられるだけの、できるだけ少ない人数で、自分で通え

る距離に、地域の人が気軽にのぞけるまちの中に。作業所から就職できれば、たとえドロップアウトしてもまた作業所に戻ってやり直せる。

幸い、作業所づくりの時点から仲間の送迎、指導に至るまで市民であるボランティアと親が担ったことで、障害のある人の望みや親の悩み、障害者の実際、共同作業所の意味などが充分理解されたことが現在の作業所の原動力となっていることはまちがないだろう。しかし、残念ながら、市の上層部や、親の会の一部（特に役員クラス）には理解を得ることが困難で、共に作業所づくりができなかったために、現在もしこりをのこす結果となっている。急に結成されたかのように見えるため、憶測めいた不信感を抱かれていることは否めない。このことが作業所の運営を窮地に追い込んでいることも事実である（通所授産施設建設の動きなど意図的な対抗もある）。ただ、行政の手により安易に設立されれば（運営が安定すれば）、家族的な雰囲気の中、地域に根ざし、希望するどんな障害者も受け入れ、障害のある人が住みやすいように地域住民と共に地域を作り変えていくという作業所本来の姿を失うというジレンマがある。

こんなこともあった。平成元年6月、作業所用地を市に求める請願署名運動を展開し始めた。毎月発行している社協の機関紙へも、協力依頼文を掲載した。ところが、市内の地区長へ配布を終えた途端、市から同紙の全紙回収命令が下った。社協にとって幻の平成元年7月号となってしまった。

運営費補助の低額な地域での作業所運営はきわめて困難であり、早期に通所授産を拠点としたランチ方式の法人化を目指さざるを得ない。（実績が認められて市単独で7,000円補助上乘せ・合計24,000円/月・人）

仲間の力はすごい。

開所以前から訪問していた人にMさんがいる。母親は、本人が40才頃になるまで外に出したことの無かった聴覚障害者（親は知的障害と思っていた）だが、作業所に通うようになって、思いを他の仲間に伝えたくて、自分の名前を声に出して言えるまでになり、平成3年1月、就職もできた。母親は喜びと驚きでいっぱい。身体障害と重い知的障害の重複障害のある人は、始めは全送迎だったのに、自分でバスに乗り、通えるようになった。精神障害のため、人混みの中へ出られなかった女の人が、600人近くの協力による、作業所の支援コンサートに参加できた。母親も驚く。

平成元年3月、作業所にとって画期的な組織が誕生した。それまで作業所の仲間は、親やボランティア、職員に何かをしてもらうことばかりだった。でも、自分たちもできることがたくさんある。自分たちができることはやっといこうと、自発的に仲間の自治会「コロナの会」が誕生した。

作業所ボランティアが、老人施設支援ボランティアグループ「あゆみ」に所属して特別養護老人ホームのシーツ交換を行っていたこともあり、そのボランティアらと一緒に仲間が交替でシーツ交換に参加し始めた。不安げな関係者をよそに、すぐ入所しているお年寄りと友達になった。今は、施設からもあてにされている。その後、わずかな給料の中から少しずつ積み立て、奈良への旅行を企画、「コロナの会ニュース」を発行するまでになった。これは、旅行の感想を文章や絵で綴ったもので、字が書けない人はワープロを打てる人に頼んだり、絵を書くなどして、印刷をボランティアに頼んで完成した宝物である。こ

うした仲間の力の成果は、数え上げればきりが無い。

福祉は人

多くのボランティア、地域の人によって支えられた作業所であるが、その推進のためには、それに専念できる人がぜひとも必要である。それも優れて豊かな感性と、情熱のある人が必要だ。幸いにして、先の条件を満たし、知的障害者更生施設に勤務した後、滋賀県の作業所に勤務していたOさんを所長として迎え、平成2年2月からは、知的障害者更生施設に勤務していたT導員を迎えることができた。しかし、作業所職員の労働は苛酷である。

障害を持つ利用者が抱える諸問題を共に解決する職員は、きわめて高度な専門知識と技術を要し、日々下記の業務に忙殺されている。したがって職員の数は、10名程度の作業所では3～4人が普通。認可授産施設と比べるなら、その人数でもまだ少ないと言わざるを得ない。

しかし残念ながら、現作業所は財源が乏しいために2人の職員で運営されているが、多くの障害を持つ利用者を指導することは限界に達している。その不足分をボランティアによって支えられているのである。

作業所職員の職務内容

仲間に関して

安全・健康管理

送迎

作業の受納（袋・枙枙・箱・農耕等）

作業指導・訓練

日常生活指導

障害を持つ仲間の自治会活動への支援

社会参加のための活動

（各種文化活動やスポーツ活動などへの参加促進）

就労のための働きかけ

ボランティアに関して

安全管理

送迎

障害者支援のための指導

新たなボランティアの育成とコーディネート

作業所を通して地域が変わる

障害のある仲間が変わった影には、数えることができない程多くの地域の方々の見守りや、励ましがあるからにほかならない。

元国家公務員のOさんは、作業所が開所している日は毎日手弁当で作業所に通い、仲間と共に作業をしたり、経理事務を手伝っている。和菓子屋の商店主Oさんは、開所当初から仲間の送迎を一手に引き受けてくれている。在宅障害者・高齢者支援グループにも所属する主婦SさんとTさんは送迎と、仲間が作る給食を手伝ってくれている。市街地に家があるTさんやOさんの家には、休日になると作業所の仲間が訪れる。

地域社会に関して

障害者の正しい理解のための活動

（広報・バザー・つどう会などの企画実施）

育てる会の拡充と支援

地域の障害者の実情把握

（調査・家庭訪問等）

作業所運営に関して

作業所授産会計の担当

運営委員会への支援

共同作業所運営のための資金集め

（バザー、募金活動）

保護者・関係者に関して

各種福祉制度の助言や相談

新たなニードに関する調査・検討

障害者の家庭環境調整のための援助

向島町は若い人が減って、無形文化財である上野祭りの”だんじり”の引き手がいなくなり、作業所の仲間がその役を買ってでることになった。長く上野に住みながら、祭りを見るのがはじめてという仲間もいた。今では”だんじり引き”を地区からあてにされている。

作業所運営の資金源の一つであるアルミ缶の収集は市内外を問わず、数多くの人が集めて持ってきてくれる。作業所の理解と、運営資金捻出のため、「上野ひまわり共同作業所を育てる会」を設立当初から設置。約400名の会員を擁し、大きな資金源となっている。

平成元年11月、作業所存亡の危機が訪れた。唯一の職員であるO所長が過労と、腰痛のため倒れたのだ。しかしこの間、仲間の願いにより、変則的にはあるが、ボランティアによって20日間程開所が続行された。幸いその後、無理はできないものの、所長は回復、職場に復帰した。これは、作業所が仲間にとって掛け替えの無いものであるという認識と、開初頭所からボランティアが支えてきたという底力がなし得た技であろう。

平成2年3月には、開所当初から作業所を支援してきたボランティアを中心に、ボランティアスクール修了生を交じえ、専属のボランティアグループ「ダイナミックス」が誕生した。

作業所の仲間の実習受け入れにはじめは積極的ではなかったある企業家は、「どこに障害があるのかわからない。こんなに一生懸命仕事をしてくれるとは思ってもいなかった。近い将来社員として雇いたい人もいる。」週に2回作業所から交替で参加する実習生を受け入れてくれている。

ボランティアは作業所での体験を地域の人に話すことで、障害のある人に関する理解が深まる。いわば口コミで伝わるのである。あるボランティアは「もしかしたら施設に収容されるということは、その人の心の生命維持装置をはずすことなのかも知れない」「人からは、与えていると見られるけれど、実は与えられているんです。今は本当に幸せです」とつぶやく。

こうした理解と共感が地域を変えていくはずである。当事者の組織化とは当事者だけの組織化でなく、理解者を獲得し、共働するための組織化でもあろう。

それぞれの違いを認め合い、共に手を携えて生きていくこと・・・国際化を迎える我が国の課題でもあろう。

運営だけでなく、親の死後の介護問題も大きな課題だ。回覧板の回ってくる普通の家に共同で生活する、グループホーム実現に向けての熱い話し合いが親やボランティア、職員との間で交わされている。

作業所の開所以来多くの感動的な日の中で、忘れられない日がある。作業所がボランティアで支えられ、毎日曜日に開所し、昭和63年9月からは週5日の開所になるため、4月からためてきた給料(平均1,800円)を支払う昭和63年8月7日(日)、参加したすべての親やボランティアの目には涙が浮かんでいた。ある仲間は、「これで親に良い物を買ってやるんだ」。またある仲間は、「これまで勤めていた時には何十万円という給料をもらっていたが、今日のお金程大事な物は無い。通帳を作ったためる」と言う。こうした感動を多くの人と分かちあいながら、ゆっくりと、しかし確実に、障害があっても幸せに暮らせるまちになっていくことを見つめていきたい。

【開所以後の経過（V の数字は参加したボランティア 人数・アンダーライン は仲間の人数）】

5/8	オリエンテーション	8名		受け入れ～8/28	
	自己紹介・レクリエーション	V18名	8/5	紙袋の紐付け	8名
5/15	紙箱組み立て	8名			V6名
	新聞記者訪問	V17名	8/6	紙袋の紐付け	8名
5/22	名張育成園々遊祭参加	8名			V8名
		V10名	8/7	紙袋の紐付け	8名
6/5	紙箱組み立て・紙袋の紐付け	7名		4～7月分給料支払い	V8名
		V12名		平均1,800円	
6/12	紙袋の紐付け	7名	8/20	紙袋の紐付け	9名
	新聞記者訪問	V10名			V8名
6/19	紙袋の紐付け	7名	8/21	紙袋の紐付け	9名
	やまなみ共同作業所仲間来訪	V11名		弁当持参	V8名
	運営委員会開催 (西忍町に移転決定)			(午前10時～午後1時) 稲葉養護学校生徒訪問	
	補助金申請書提出		8/22	カレーライスパーティー 誕生会	9名 V6名
6/26	紙袋の紐付け	7名		(午前10時～午後3時30)	
	レクリエーション	V15名	8/28	紙袋の紐付け	9名
7/3	事業所閉鎖に伴い <u>西忍町に引っ越し</u>	8名 V12名		運営委員会開催奥西所長就任	V12名
7/10	募金箱作り	8名		「手をつなぐ親の会」との懇談	V15名
	運営委員会開催	V6名	9/2	やまなみ共同作業所との交流会	6名
7/17	紙袋の紐付け	8名			V7名
	運営委員会開催・新職員依頼	V9名	9/3	紙袋の紐付け	8名
7/24	募金箱作り	7名			V11名
	レクリエーション	V5名	9/4	農耕・白檜神社で昼食	8名
7/30	サマーキャンプ(高倉)	9名			V12名
	新聞記者訪問	V38名			
	城山養護学校実習生				

10月	9名	3月	専属ボランティアグループ	16名
11月	第1回バザー - 開催(コイ)		「たいみっく」結成	
	福祉助成(朝日・富士・24TV)	4月	職場実習開始(1名)	17名
12月	第1回支援コンサート 開催	5月	加藤制作所外勤開始	
平成元年		7月	【たいんクラッチ(7部門)】	
1月	福祉助成(読売)	8月	作業場2棟借用(1ヶ月50,000)	
	印刷所業務拡張のため立ち退き	9月		18名
2月	法花に移転	10月	福祉の店参加	
	【農耕(コイと契約)】		第3回バザー開催	
3月	【ホッパ入箱詰め(2部門)】	11月	全社協「ぼらんていあ」取材	
	仲間の自治会「コロナの会」発足	12月	名張市精神障害者入所承認	19名
	特老第2梨の木園シツ交換開始	平成3年		
4月	名張市からの入所承認	1月	1名プレス工場正式就職	
	【たほ箱組み立て(3部門)】		全社協ビデオ取材	
6月	精神障害者の入所承認		全社協「ぼらんていあ」創刊号	
7月	安定運営のため請願署名運動開始		トップに掲載	
8月	【がさつ組組み立て(4部門)】	3月	第3回支援コンサート 開催	
	諸事情により請願中止	4月	重度身体障害者受け入れ開始	23名
9月			市内民生委員全員97名が賛助会員に	
10月	第2回バザー開催	5月	全社協ビデオ「やさしさのまちが好き！」で紹介	
	福祉の店参加	12月	土地売却にともない	
11月	〇所長推間板ヘルニアで療養		<u>上之庄へ移転(元保育園)</u>	
	20日間程ボランティアだけで開所される			
平成2年		平成6年7月	法人認可申請	
2月	T指導員就任			
	第2回支援コンサート 開催			

住民参加福祉運動としての共同作業所づくり

上野市社会福祉協議会
福祉活動専門員 平井俊圭

昭和59年度～昭和62年度 在宅障害者宅訪問 7ケース（親の帰っている夜）
各種の福祉制度等に関する相談に応じる

認可収容施設の建設計画が遅々として進まない中、調査によって障害者の親はぜひ上野に共同作業所が必要だとの願いがあることが明らかになっていった。

当初一部の親は収容施設を望んでいた。まず私達で可能なところから始め、障害のある人を地域から隔離するのではなく、地域の人に障害のある人についての理解と協力を求める意味からも、障害のある人があたりまえに暮らせる”まち”にするためにも、共同作業所の必要性を訴えた。

具体化のきっかけ

ある親 福祉事務所で他市施設通所を断われ、社協へ相談に来たことから始まる。

今のまちは何かおかしい

障害のある子は地域社会から離れさせられている。地域の人でも障害のある人にどうかかわっていいのかわからなくなっている。……就職他さまざまな困難を招いている

住民の共感的理解の広がりとは行政関与とのジレンマ

行政の手により安易に設立されれば（運営が安定すれば）、家族的な雰囲気の中、地域に根ざし、希望するどんな障害者も受け入れ、障害のある人が住みやすいように地域住民と共に地域を作り変えていくという作業所本来の姿を失うというジレンマがある。

仲間の力はすごい。

聴覚障害者が、作業所に通うようになって、自分の名前を声に出して言えるまでになり、平成3年1月就職もできた。母親は喜びと驚きでいっぱい。身体障害と重い知的障害の重複障害のある人は、始めは全送迎だったのに自分でバスに乗り通えるようになった。精神障害のため、人混みの中へ出られなかった女の人が、600人近くの協力による、作業所の支援コンサートに参加できた。

平成元年3月、作業所にとって画期的な組織が誕生した。自分たちができることはやっていこうと、自発的に仲間の自治会「コロナの会」が結成された。

作業所ボランティアらと一緒に仲間が交替で特別養護老人ホームのシーツ交換に参加し始めた。不安げな関係者をよそに、すぐ入所しているお年寄りと友達になった。

わずかな給料の中から少しずつ積み立て、旅行を企画、「コロナの会ニュース」を発行するまでになった。こうした仲間の力の成果は数え上げればきりが無い。

福祉は人

作業所運動に専念できる優れて豊かな感性と、情熱のある人がぜひとも必要である。正式開所の昭和63年9月から作業所勤務経験のある人を所長として迎え、平成2年2月からは、知的障害者更生施設に勤務していた指導員を迎えることができた。しかし、作業所職員の労働は苛酷である。その不足分はボランティアによって支えられている。

作業所職員の職務内容

仲間に関して

安全・健康管理

送迎

作業の受納

作業指導・訓練

日常生活指導

障害を持つ仲間の自治会活動への支援

社会参加のための活動

(各種文化活動やスポーツ活動などへの参加促進)

就労のための働きかけ

ボランティアに関して

安全管理

送迎

障害者支援のための指導

新たなボランティアの育成とコーディネート

作業所を通して地域が変わる

地域社会に関して

障害者の正しい理解のための活動

(広報・バザー・交流会などの企画実施)

育てる会の拡充と支援

地域の障害者の実情把握

(調査・家庭訪問等)

作業所運営に関して

作業所授産会計の担当

運営委員会への支援

共同作業所運営のための資金集め

(バザー、募金活動)

保護者・関係者に関して

各種福祉制度の助言や相談

新たなニーズに関する調査・検討

障害者の家庭環境調整のための援助

元国家公務員のMさんは、毎日手弁当で作業所に通い、仲間と共に作業をしたり経理事務を手伝っている。和菓子屋の店主Oさんは、開所当初から仲間の送迎を一手に引き受けてくれている。在宅障害者・高齢者支援グループにも所属する主婦SさんとTさんは送迎と仲間が作る給食を手伝ってくれている。市街地に家があるTさんやOさんの家には、休日になると作業所の仲間が訪れる。

無形文化財である天神祭りの「だんじり」の引き手を地区からあてにされている。

作業所運営の資金源の一つであるアルミ缶は市内外を問わず、数多くの人が集めて持ってきてくれる。作業所の理解と運営資金捻出のため、「上野ひまわり共同作業所を育てる会」を設立当初から設置。約400名の会員を擁する。

平成2年3月、専属のボランティアグループ「ダイナミックス」が誕生。

作業所の仲間の実習受け入れにはじめは積極的ではなかったある企業家は、「どこに障害があるのかわからない。こんなに一生懸命仕事をしてくれるとは思ってもいなかった。近い将来社員として雇いたい人もいる。」週に2回作業所から交替で参加する実習生を受け入れてくれている。

ボランティアは作業所での体験を地域の人に話すことで、障害のある人に関する理解が深まる。いわば口コミで伝わる。あるボランティアは「もしかしたら施設に収容されるということは、その人の心の生命維持装置をはずすことなのかも知れない」「人からは、与えていると見られるけれど、実は彼等から多くのものを与えられている様に思っています。そんな毎日が幸せです」とつぶやく。

こうした理解と共感が地域を変えていくはずである。当事者の組織化とは当事者だけの組織化でなく、理解者を獲得し、共働するための組織化でもある。